岩手県立博物館だより

Newsletter of the Iwate Prefectural Museum
岩手県立博物館ホームページアドレス
http://www.pref.iwate.jp/~hp0910/

2013.6 No. 137

目次／川の上を飛ぶゲンジボタル　**表紙**／エッセイ「地図の魅力」**p.2**／事業報告「チャレンジ！ はくぶつかん」、活動レポート「みんなでつくる植物誌」**p.3**／展覧会案内「いわての光る生きものたち」**p.4-5**／いわて文化ノート「新発見！天明三年田山暦の謎」**p.6-7**／インフォメーション **p.8**

第64回企画展　いわての光る生きものたち
～ 大震災からの復興の光 ～

2013年6月29日(土)～8月18日(日)

川の上を飛ぶゲンジボタル（宮古市）　**佐藤嘉宏氏撮影**

古くは奈良時代よりホタルの幽玄な光は、日本人を魅了しています。その中でも日本のホタル文化の代名詞が、ゲンジボタル*Luciola cruciata*です。約2,000種の世界のホタルの幼虫がほとんど陸生ですが、このホタルの幼虫は、清流の水中で過ごすめずらしいホタルです。成虫の雄は体長約13mmで写真のように雌を求めて川筋を移動しています。その雄をやや大きい雌が葉上で待ち受けています。成虫の寿命は雌雄で異なりますが、１週間前後です。そのはかなさが、日本人の感性に合っているのかもしれません。

■エッセイ

地図の魅力

館長　中山　敏（なかやま　さとし）

地図には、表現されている地域の様々な情報が記されている。３月中旬まで当館で開催した「2011.3.11平成の大津波被害と博物館」でも幾つかの地図を展示したが、私自身が展示された地図を読図し、感じたことを記してみたい。

「東日本大震災津波詳細地図」は、本県沿岸部の５万分の１地形図に津波浸水地域を表現したものである。また、陸前高田市の「遺跡の被害状況」は、気仙地域の２万５千分の１地形図４枚（今泉・鹿折・陸前高田・大船渡）に遺跡の分布と津波浸水範囲を表したものである。遺跡の分布は261遺跡で、浸水地域内が96カ所であるが、分布図を見ると完全に浸水域内となっているのは数カ所のみで、奈良・平安の時代の遺跡である。被害を受けたほとんどは浸水域の線上に位置し、浸水域外の遺跡は全て縄文時代のものである。あたかも、縄文の人々が津波被害を解って生活していたかのようである。それでは、貞観11年(869)に三陸沿岸を襲った巨大地震（M8.3）における津波の浸水範囲や被害は、どのような状況であったのだろうか。興味は尽きない。いずれにせよ２つの地図は、今後の復興計画の基本とすべき地図である。

写真の地図は、気仙郡「廿四箇村絵図」を合成したものである。大肝入が仙台藩の命令で元禄12年(1699)に作成し、生江助内に提出した「気仙郡古地図」を基に、文政５年(1822)前後に各村一斉に作られた村絵図の控図である。19枚の控図は、吉田家から陸前高田市立図書館に寄託されて流出を免れたものである。乾燥処理後にデジタル撮影された19枚に加え、唐丹・世田米・竹駒・今泉の部分は岩手県立図書館所蔵の絵図を、末崎村は大船渡市立博物館所蔵の気仙郡絵図を使い、廿四箇村の絵図を合成したものである。

気仙郡二十四箇村村絵図 合成

高田村、濱田村（現在の米崎町）、越喜来村、上有住村、勝木田村・小友村・廣田村の５点の村絵図は、共通して海岸線が詳細に描かれ、岬や岩礁、小島の様子が記されており、舟での交流や漁業中心の生活が展開されていたことが推測される。各村絵図には川や尾根、山間部では杉や松、桜等の樹種が描かれている。また、寺や古舘、街道や一里塚、堤や沼が明示され、集落の外、水田や畑地などの土地利用が表現されている。リアス式海岸で山が海岸線にせまっている当地域では畑地は斜面に形成され、集落や水田は河川流域の沖積平野に分布している。畑地の作物は不明であるが、雑穀や野菜の外、日本の北限とされる茶畑が考えられる。高田村の絵図からは、高田松原の防風林の存在を読み取ることができ、松原の背後に水田地帯が形成されている。小友村の平坦地は廣田半島の陸繋砂州であるが、この当時から水田として利用されている。これらの村絵図から、地形や水などの自然環境と人々の生活との関係が良く理解できる。陸前高田市の「遺跡の被害状況」を表す地図では、縄文人の津波被害を理解した生活が推測されたが、この時代には今回の津波の浸水地域に集落が形成されており、慶長16年(1611)の三陸沿岸及び北海道東岸の地震津波（M8.1）の被害はいくばかりだったのか思い巡らざるを得ない。

このように、地図を読むことによって地域の様子や人々の生活が理解され、特にも歴史地図からは当時の様子を伺い知ることができる。そして、新旧の地図を比較することにより地域の変貌や、なぜ変化してきたのかを知ることができる。さらに、地図を片手に地域を歩くことによって地域の性格、すなわち地域性をより良く理解することができる。あるいは、新たな疑問が湧き起こり想像を巡らすことによって、ロマンがかきたてられる。

参考文献

金野静一「絵図に見る藩政時代の気仙」熊谷印刷出版部(昭和56年10月25日発行)

平成25年春の人事異動　**【転入】**竹高 昭 総務課長〔前 (公財)岩手県文化振興事業団美術館総務課長〕／鎌田 勉 学芸第三課長・上席専門学芸調査員（歴史部門）〔前 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課主任主査〕／丸山浩治 専門学芸員（考古部門）〔前 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査課文化財専門員〕／猿橋幸子 総務課主任〔前 (公財)岩手県文化振興事業団総務部主任〕**【転出】**佐々木仁志〔前 総務課長〕(公財)岩手県文化振興事業団美術館総務課長／斎藤邦雄〔前 学芸第三課長〕(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター首席文化財専門員兼調査課長／阿部勝則〔前 専門学芸員〕(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査課主任文化財専門員／吉田秀幸〔前 総務課主査〕(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター総務課主査

■事業報告

チャレンジ！はくぶつかん

5回目の皆勤達成！！　北條富実子さん・北條良孝さん

平成24年度のチャレンジ！はくぶつかんが終了しました。今年度も前年度と同様に14名の最優秀チャレンジャー（皆勤賞）が誕生しました。

■5回目の皆勤賞：北條富実子さん（小学4年）、北條良孝さん（小学6年）

■2回目の皆勤賞：佐々木希美さん（小学3年）、佐々木真樹さん（中学2年）、千葉穂高さん（小学1年）、樋口弦さん（小学2年）、藤井美南海さん（小学3年）

■初めての皆勤賞：柴崎悠太さん（幼稚園年長組）、瀬川颯太さん（小学1年）、瀬川陽太さん（幼稚園年少組）、西窪なずなさん（小学5年）、細越空さん（小学1年）

※ご承諾いただいた方のみ紹介します（五十音順）。

チャレンジ！はくぶつかんは今年度も実施しています。4月は115名の参加者がありました。このなかから、今年度は何名の最優秀チャレンジャーが生まれるでしょうか。

（学芸第三課　川向富貴子）

北條さんご家族（2013.3）
今年度で5回目の皆勤を達成した北條富実子さん、良孝さんは平成20年度から毎月欠かさず参加してくださっています。

■活動レポート

みんなでつくる植物誌

専門学芸員　鈴木まほろ（生物部門）

「植物誌」と名のつく本を見たことがありますか。「植物誌」とは、ある地域に生えている植物の全種を網羅し、分布情報や解説などを加えた本です。岩手県では1970年に県教育委員会が刊行した『岩手県植物誌』のほか、『一関市植物誌』（千田善喜・松岡洋一著 1972年）や『遠野市植物誌』（小水内長太郎著 1987年）などが出版されています。

ここ数十年の間に岩手県の環境は大きく変わり、植物にも外来種など新顔がだいぶ増えた一方、残念ながら県内から絶滅したと思われる種もあります。また、分類が見直され新しい名前がつけられた種もあります。そこで、2020年を目標に岩手県で新しい植物誌を作ろうという活動が始まっています。

活動は現在、当館に事務局をおく岩手県植物誌調査会を中心に進められています。みんなで県内のあちこちへ出かけ、植物のリストを作ると同時に、証拠として押し葉標本を作り保管します。当館は、押し葉標本の作製や保管ができる施設として、また植物専門の学芸員がいる研究機関として、この活動に協力しています。

なんだか難しそうと思われるかもしれませんが、参加者の多くは、植物には詳しくないけど興味がある、という人たちです。名前が分からない植物があっても、標本があれば後で調べることができますし、グループ調査の時には互いに教え合うこともできます。

昨年は、2011年に津波をかぶった場所を中心に調査を行いました。津波の後にどのような植物が生えているか、ということに関心があったからです。このような調査のおかげで、岩手県から新しく発見された種も多くあります。

興味をもたれた方は、事務局まで御連絡の上、一度ぜひ活動をのぞいてみて下さいね！

現地調査の様子（2012年 山田町）

■第64回企画展

いわての光る生きものたち　～大震災からの復興の光～

会期：平成25年６月29日（土）～８月18日（日）　　会場：特別展示室

ミミズやエゾイソアイナメも光るのを知っていますか。四季折々の変化のある日本は、実は発光生物の宝庫です。そして、岩手の陸にも海にも多くの発光生物が、生息しています。

この生きものたちの光の美しさに触れ、その進化をたどりながら、岩手の自然を感じてみませんか。

■ ホタルツリーに託されたもの

岩手でホタルツリーを見たことがあるでしょうか。岩手を含む東日本では、ゲンジボタル*Luciola cruciata*が約４秒間隔で集団同時明滅をすることがわかっています。また、西日本の集団同時明滅は、約２秒間隔で行われます。同じゲンジボタルでありながら、地域の環境によって光り方が違うのです。しかし、写真１のように大規模な集団同時明滅は、本州では見られません。この写真の光の正体は、プテロプティックス・エフルゲンス*Pteroptyx effulgens*と呼ばれるホタルです。写真の撮影地インドネシアは、第2次世界大戦で多くの日本兵が亡くなった激戦の地であり、この光に日本兵も心を癒されたことでしょう。東日本大震災を体験した現代の日本人にも時空を超えて、心に訴えるものがあるのではないでしょうか。

■ 光る生きもののはじまりとひろがり

このように、色々な環境に適応しながら、多様な生きものたちが、光を放っています。それでは、どのような生きものがいるのでしょうか。

光る生きものは、植物を除く細菌から動物まで広く存在します。その多くは動物界に存在し、ヤコウチュウ*Noctiluca scintillans*のような原生生物からチョウチンアンコウ*Himantolophus Groen-landicus*（写真２）などの脊椎動物にいたる殆どすべての動物門で見られます。なかでも海産の生物が非常に多いのが特徴です。

写真１　*Pteroptyx effulgens*のホタルツリー
インドネシア　大場信義氏撮影

写真２　チョウチンアンコウ
*Himantolophus Groenlandicus*の発光
神奈川県藤沢市　横須賀市　自然・人文博物館提供

約20億年以上前には、シアノバクテリアの光合成により増大する有害な酸素を除去するために、すでに発光バクテリアが存在していたと言われています。そして、約10億年前に、上述のヤコウチュウなどの原生生物などの真核生物が一斉に分岐する時に、発光するものも出てきたと考えられます。しかし、その発光については、代謝産物の結果であり意味がないとする説やエビなどの補食者に襲われた時に光ることによりエビがさらに上位の捕食者に食べられやすくするという説もあります。約４億年前にはウミホタルの仲間がいたことがわかっています。発光を威嚇や求愛に用いるようになっています。同じような時代に、昆虫や魚類が、発光するという形質を獲得したと考えられています。発光するという形質を獲得する進化は、それぞれの光る生きもの独自に40回以上行われたと言われています。展覧会では、東北海域のエゾイソアイナメ*Physiculus maximowicziy*やマルアオメエソ*Chlorophthalmus borealis*の発光についてもご紹介します。

■ 光る生きものと環境

岩手県にもホタルやツキヨタケ*Omphalotus guepiniformis*（写真３）をはじめとする多くの光る生きもたちがいます。しかし、清流に見られるゲンジボタルについては、全国と同じように岩手県内でも昔と比べて随分といなくなったと言われています。岩手県内の田園で

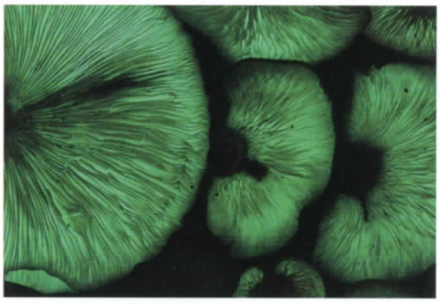

写真３　ツキヨタケ
*Omphalotus guepiniformis*の発光
秋田県森吉山ブナ林で採集

比較的多く見られるヘイケボタル*Luciola lateralis*も全国的には、減少しています。このことは、人間の生活と密接に関係している生物が住めない状況へ里山の環境が変化してきていることを示しています。皆さんの周りではどうでしょうか。

全国では、ホタルを通して、人間と他の生物との共生を考える取り組みが、続けられています。この展覧会では、名古屋城のヒメボタル*Hotaria parvula*保護と滝沢村でのホタル探検隊の取り組みを中心に追ってみます。

■ 人と光る生きもの

ホタルの光や一生が日本人の感性に合っているのか、古くは奈良時代の日本書紀や万葉集の中にもホタルと考えられる言葉が出てきます。今でも全国には蛍籠などホタル文化を伝えるものが多く残っています。

岩手県でもこの光る生きものたちを詩歌や童話に残した人がいます。それが、光と風の詩人と呼ばれる宮澤賢治です。夜の野山を歩くのが好きだった宮澤賢治は、ホタルや発光菌類に出会っています。また、「銀河鉄道の夜」の作品中にはホタルイカ*Watasenia scintillans*（写真４）が登場します。宮澤賢治は、ホタルイカを見たことがあるのでしょうか。どんなホタルに出会ったのでしょうか。この展覧会でその秘密を紐解いていきます。

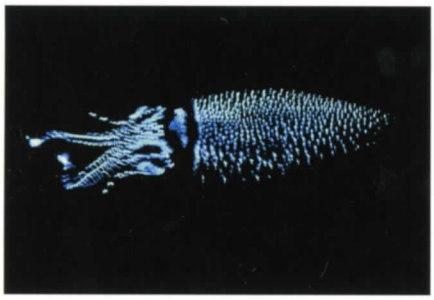

写真４　ホタルイカ
*Watasenia scintillans*の発光　富山県魚津市　稲村 修氏（魚津水族館）撮影

現在では、日本人が愛でるホタルも遺伝子レベルでの解析がされ、発光反応に関わるルシフェリンも合成でき、ルシフェラーゼについては大腸菌にこの遺伝子を組み込んで大量生産できるようになりました。このホタルの発光物質を使って、生物的な汚れの度合いを瞬時に計測できるようになり、食品業界などで大いに利用されています。

最近では、下村脩博士がノーベル賞を受賞したオワンクラゲ*Aequorea victoria*の発光に関わる蛍光タンパク質ＧＦＰが記憶に新しいのではないでしょうか。このＧＦＰも、ガン細胞などの病巣の状態を示すマーカーとして医療現場などで利用されています。また、ＧＦＰが無害であることから、生命科学でＧＦＰ遺伝子組み換え生物を活用した実験でも多く使われるようになっています。光るＧＦＰメダカやカイコについての最新の情報についてもご紹介します。

■ 復興の光

この展覧会では、東日本大震災で大きく変わった沿岸の光る生きものたちの環境や被災した標本にも触れていきます。美しくも厳しい自然環境を持つ岩手の一面を知り、生きものの光に心を癒していただければ幸いです。

（主任専門学芸員 藤井千春（生物部門））

もよおし

◆**展示解説会**　6月30日(日)、7月21日(日)、8月10日(土)　各回14：30～15：30　特別展示室・当日受付・要入館料

◆**記念講演会**　8月11日(日)　13：30～15：00　講堂・当日受付・聴講無料
「ホタル点滅の不思議　－地球の奇跡、復興への光－」　大場信義氏(大場蛍研究所所長、神奈川大学客員教授)

◆**こども☆ひかりキラキラ復興フェスティバル**　アクアマリンふくしま移動水族館、光るバッジづくり、光る絵を描こう、など
6月29日(土)・30日(日)　9:30～16:00　体験学習室ほか・当日受付・参加無料（※保護者の方は入館料が必要です。）
全国からいろんなミュージアムが応援に！

◆**ひかりフォーラム**　7月14日(日) 10:00～12:00　講堂・当日受付・聴講無料
小原 玲氏（動物写真家）、猿渡敏郎氏（東京大学大気海洋研究所）、八木 剛氏（兵庫県立人と自然の博物館）ほか

◆**第66回自然観察会「ヒメボタルを育む森に会いに行こう！」**　7月14日(日)　13:30～20:30　二戸市折爪岳　※要事前申込

◆**光の実験室（トーク＆実験ショー）**　7月27日(土)・28日(日)　11:30～12:00、14:00～14:30　講堂・当日受付・聴講無料
笹川浩美氏（科学技術館）ほか

◆**深海生物ペーパークラフト教室**　8月3日(土) 10:00～12:00、13:00～15:00　体験学習室・当日受付・参加無料(※保護者の方は入館料が必要です。)

◆**たいけん教室～みんなでためそう～「光るバッジづくり」**　7月7日(日)　13:00～14:30　※要事前申込　実技室・参加無料

◆**ミュージアムシアター「光る生きもの特集」**　7月6日(土)、8月3日(土)　13:30～15:15　講堂・当日受付・視聴無料

■いわて文化ノート

新発見！天明三年田山暦の謎

主任専門学芸員　瀬川　修（民俗部門）

みなさんは田山暦というものをごぞんじでしょうか。田山というのは旧田山村のことで、現在の八幡平市にあたります。ここで田山暦が作られていました。この暦は現在、博物館や図書館でしか見ることができません。今は作られていないからです。

田山暦はちょっと変わっていて、文字は使われていません。本来、文字で表すべきところを絵や記号を使っています。それで絵暦というのです。盛岡城下でも別の暦を作っていましたので、ふたつあわせて南部絵暦といいます。今回、田山暦のほうを取り上げたのは、数十年に1度という大発見があったからです。

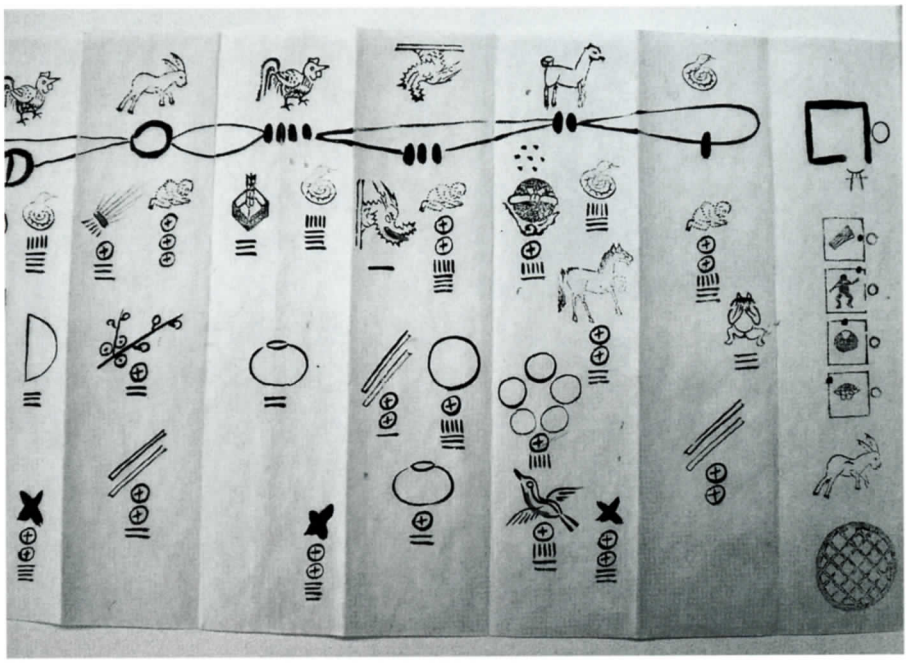

写真１　天明三年田山暦　岩手県博本（部分）

■現存最古の天明三年田山暦

田山暦は江戸時代から知られていました。よほどめずらしかったらしく、橘南谿や菅江真澄などの諸国漫遊の旅人が田山暦のことを書き記しています。特に橘南谿は天明三年田山暦を絵で描き残し、実物が発見されるまでたいへん貴重な資料でした。

この天明三年田山暦は昭和30年代のはじめに突然売りに出されて、現存最古の田山暦となりました。長く個人が所蔵し、当館ではその複製（レプリカ）を展示していましたが、平成8年に寄贈していただき、いまでは実物を展示できるようになりました。平成16年には岩手県指定有形民俗文化財に指定されました。

この暦は全長90センチメートルあります。写真１はそのはじめの部分で、1月から5月までです。田山暦はこのように文字を使わないため、説明されないと何が書いてあるかがわかりません。年号さえ書いてありません。

そこで何が書かれているかを最初に見ていくことにしましょう。田山暦は折暦といって、折りたたむようにできています。そこで折目ごとに見ていきます。

1折目（神さまの方角）

ここには歳徳神、太歳神、大陰神、歳刑神、歳殺神といった神さまの方角が書かれています。歳徳神の方角は明きの方とか恵方といわれ、今では恵方巻を食べる方角のことです。他の神さまは禁忌で、方角に向かってしてはいけないということですが、ここでは省略します。また、庶民は卯年ということがわかればよかったのでしょうか、年号はありません。なお、うさぎの絵の下はトオシというふるいで、とし（年）と読ませています。

2折目（1月）

一番上の蛇は1日が巳の日であるということ。縄1本に棒がかかるのは、小の月ということです。鬼が泣いているのは節分を表します。

3折目（2月）

縄2本に棒がかかるのは大の月ということです。5つの団子（丸）がありますが、これは彼岸の入りです。その下の鳥は社日といって、神社にお参りする日です。春と秋にあり、どちらも鳥の絵で表されます。すると、一般的にこの鳥はツバメと考えられますが、ツバメにはあまり似ていないように思うのは私だけでしょうか。（橘南谿の写しはツバメです。）

4折目（3月）

一番下の碁笥のような丸いものは種壺で、夕顔などの果実を刳りぬいたものです。種壺は「種まきよし」と読みます。

最後にトンチを利かせた2題を解いてみてください。

5折目（4月）　重箱に矢の絵。

6折目（5月）　梅の花。

答えは八十（重）八夜（矢）と入梅です。田山暦は文字の読めない人のために作られたといわれていますが、この入梅だけは文字を知らないとわかりません。

■味噌カレンダー

昨年のことです。新発見がありました。それは天明三年田山暦が新しく発見（公開）されたのです（写真２）。

しかし、この暦は左の写真とくらべ

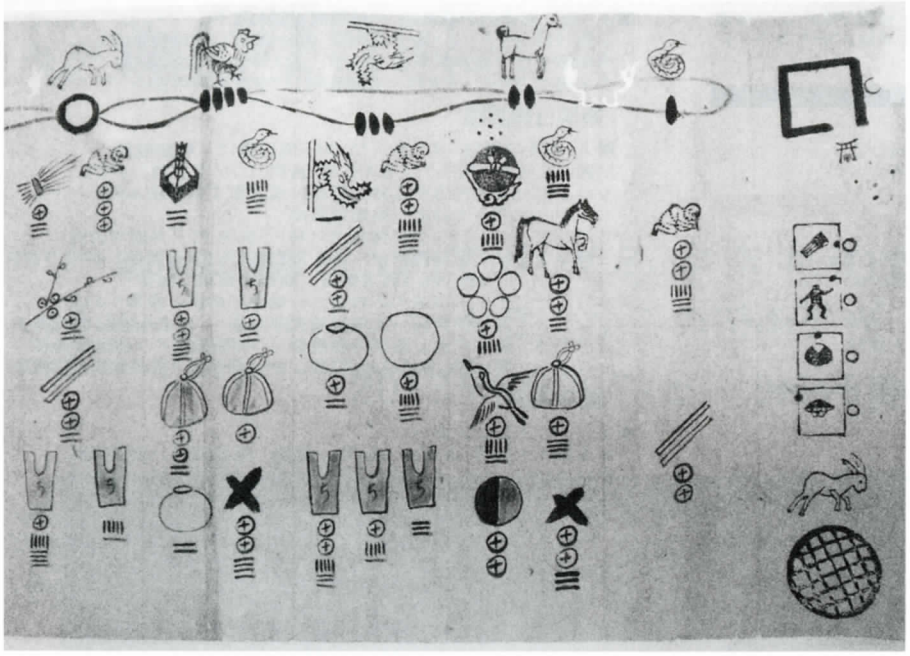

写真２　同　蛇足庵本（部分）　蛇足庵蔵

て絵（暦注）が多く、混み合っている印象を受けます。また、見慣れない絵があります。3折目の鳥の隣の絵は何でしょうか。

これは、味噌玉（写真３）です。味噌玉は最近では見られなくなりましたが、農家の土間や軒につるされていました。自家製の味噌を作っていたのです。私はこの絵は梅の花のように何かを表しているのではないかと考えました。

しかし、それはちがいました。岡田芳朗氏（暦の会会長）は伊勢暦に「みそつくりよし」という暦注を発見しました。工藤紘一氏（博物館研究協力員）も同年の江戸暦に同様の記述を見つけたそうです。この絵は伊勢暦の「みそつくりよし」を味噌玉で表したものなのです。

この天明三年田山暦は、昨年、たばこと塩の博物館（東京・渋谷）で公開されました。ちょうどその頃、田山暦の研究にドイツから当館を訪れていたシュトレープ博士は、この暦を「味噌カレンダー」と呼びました。まさにいい得た命名だと思いました。

■二つの暦の特徴

当館の所蔵する天明三年田山暦を岩手県博本、味噌カレンダーの方を蛇足庵本と呼びます。その特徴を比べると次のようになります。

（１）蛇足庵本には味噌玉がある。

（２）蛇足庵本には節分がない。

（３）岩手県博本には春分・秋分がない。（写真４）

（４）蛇足庵本には地火が多い。(*地火は鍬の絵で表されています。)

では、なぜ2種類の天明三年田山暦が生まれたのでしょうか。どちらかが試作という考えがあります。しかし、どちらも彩色されている点、市中に出回っているという点で、理解しがたいところがあります。

私はもともと2種類あったのではないかと考えています。味噌（酒を含む）作りのさかんな地域には味噌カレンダーの方を配ったのです。これはもっとたくさんの天明三年田山暦があればわかることですので、新発見を期待したいと思います。今度発見される天明三年田山暦はどちらのタイプでしょうか。

写真３　味噌玉

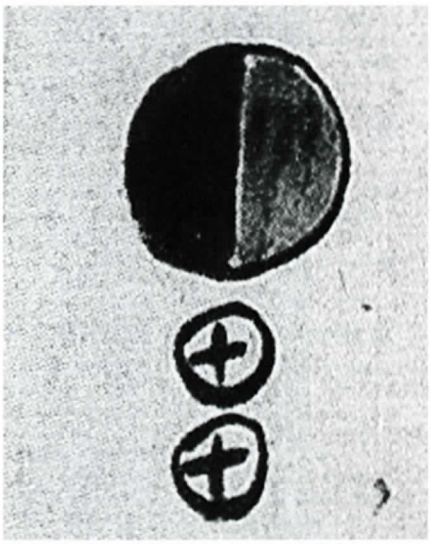

写真４　春分　（丸に十は10を表す。20日の意）

この蛇足庵本は平成25年2月26日から3月31日まで当館でトピック展として展示されました。所蔵者蛇足庵様には心より感謝申し上げます。また、3月20日には暦の会会長の岡田芳朗氏による「新発見！もうひとつの天明三年田山暦の謎と南部絵暦の魅力」と題した特別講演会を開催し、理解を深めることができました。重ねて御礼を申し上げます。

岩手県立博物館
IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション〈2013.6.1～2013.9.30〉

文化庁長官から感謝状

東日本大震災によって被災した文化財等の救援・修復活動への功労者として、文化庁長官から岩手県立博物館に対して平成25年３月25日に感謝状が贈呈されました。

お知らせ

●夏休み臨時開館　８月５日(月)、８月12日(月)
●資料整理のため休館　９月１日(日)～９月10日(火)
●敬老の日　65歳以上入館無料　９月16日(月・祝)

展覧会

■第64回企画展
「いわての光る生きものたち ～大震災からの復興の光～」
平成25年６月29日(土)～８月18日(日)　特別展示室
ホタルや深海魚など、たくさんの光る生きものの美しさに触れ、その進化をたどりながら、発光生物を取り巻く岩手の自然も紹介します。
■展示解説会　14:30～15:30　特別展示室　要入館料
６月30日(日)、７月21日(日)、８月10日(土)
■記念講演会　８月11日(日)　13:30～15:00　講堂　聴講無料
「ホタル点滅の不思議　―地球の奇跡、復興への光―」
講師：大場信義氏（大場蛍研究所所長）
■こども☆ひかりキラキラ復興フェスティバル
６月29日(土)・30日(日)　9:30～16:00　体験学習室・芝生広場
アクアマリンふくしま移動水族館、光るバッジづくり、光る絵を描こう、など
■ひかりフォーラム　７月14日(日)　10:00～12:00　講堂　聴講無料
出演：小原 玲氏（動物写真家）、八木 剛氏（兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）、猿渡敏郎氏（東京大学大気海洋研究所）他
■第66回自然観察会＆ひめほたるフェスティバル
「ヒメボタルを育む森に会いに行こう！」　二戸市折爪岳
７月14日(日)　13:30～20:30　博物館集合・解散(会場までバス移動)
講師：八木 剛氏（兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）
定員40名（小学生以上）　参加費100円（保険料他）　要事前申込
■たいけん教室～みんなでためそう～　ひかるバッジづくり
７月７日(日)　13:00～14:30　要事前申込み
※申込み方法については「たいけん教室」の欄をご覧ください。
■ミュージアムシアター　「光る生きもの特集」
７月６日(土)、８月３日(土)　13:30～15:15　講堂　視聴無料
※くわしくは「ミュージアムシアター」の欄をご覧ください。
■光の実験室　７月27日(土)・28(日)　11:30～12:00、14:00～14:30
講堂　当日受付　聴講無料（トーク＆実験ショー）
講師：笹川浩美氏（科学技術館講師）、藤井千春（当館学芸員）
■深海生物ペーパークラフト教室
８月３日(土)　10:00～12:00、13:00～15:00　体験学習室　当日受付
講師：藤井千春（当館学芸員）ほか

観察会

◆第65回地質観察会　「山口鉱山跡を訪ねて」
７月７日(日)　10:00～15:00　山口鉱山跡（宮古市）
山口鉱山跡で、紫外線で青白く蛍光する灰重石などを調べます。
講師：吉田裕生氏（盛岡大学非常勤講師）
現地集合・解散　定員20名（小学生高学年以上）
参加費100円（保険料）　※要事前申込み
◆第66回地質観察会　「早池峰山周辺の地質」
９月23日(月・祝)　10:00～15:00　盛岡市根田茂～花巻市大迫町
根田茂帯と南部北上帯最下部の地層・岩石のかかわりについて分かりやすく説明します。
講師：川村寿郎氏（宮城教育大学教授）
博物館集合・解散（バス移動）　定員20名（小学生高学年以上）
参加費未定（バス代・保険料等負担）　※要事前申込み
◆第65回自然観察会　「津波に耐えた砂浜の植物」
６月16日(日)　8:00～17:00　久慈市夏井川河口
津波に耐えて花を咲かせる砂浜の植物を観察します。
講師：島田直明氏（岩手県立大学）
博物館集合・解散の場合：参加費3000円（バス移動）、定員20名（小学生以上）／現地集合・解散の場合：参加費300円、定員なし（小学生以上）　※要事前申込み
◆第66回自然観察会＆ひめほたるフェスティバル
「ヒメボタルを育む森に会いに行こう！」
７月14日(日)　13:30～20:30　二戸市折爪岳
観察会をとおしてヒメボタルを育む自然と環境について考えます。
講師：八木 剛氏（兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）
博物館集合・解散（バス移動）　参加費100円（保険料）
定員40名（小学生[保護者同伴]以上）　※要事前申込み

伝統芸能鑑賞会

■「一戸の山伏神楽 ～高屋敷神楽～」
６月２日（日）13:30～15:30　民家（曲り屋）ほか　鑑賞無料
高屋敷神楽は北東北の山伏神楽の古い形態を今日に残しています。今回の公演では「権現舞」「鐘巻」「鶏舞」を演じます。
出演：一戸町 高屋敷神楽保存会

考古学セミナー

■第１回「安倍氏の本拠地 ―鳥海柵を訪ねて―」
９月21日（土）　8:30～17:00　金ケ崎町（現地見学会）
博物館または盛岡駅集合・解散（バス移動）　定員30名
参加費4,000円（バス代・保険料等）　※要事前申込み

県博日曜講座

第２・第４日曜日　13:30～15:00　当日受付　聴講無料
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
６月９日「志和代官所の年中行事～成海家文書を読み解く～」　佐々木勝宏（当館学芸員）
６月23日「バンニングで残る重い砂」　吉田 充（当館学芸員）
７月14日「被災金属資料からみた東日本における古代・中世の物質文化交流」　赤沼英男（当館学芸第二課長）
８月11日「ホタル点滅の不思議　―地球の奇跡、復興への光―」　大場信義氏（大場蛍研究所所長）　※企画展記念講演会
８月25日「新春を彩る岩手の蘇民祭」　川向富貴子（当館学芸員）
９月22日「早池峰山周辺の地質(仮)」川村寿郎氏（宮城教育大学教授）

週末の催し

◆ミュージアムシアター
毎月第１土曜日 13:30～15:10　講堂　当日受付　視聴無料
童話や昔話、アニメなどを上映します。小中学生～一般対象
６月１日　郷土の歴史アニメ「アテルイ」(93分)
７月６日　特集「光る生きもの」ホタル（100分）　①ホタルの恋の大作戦[実録]　②ホタルが育つ水[実録]　③勇気あるホタルととべないホタル[アニメ]　④蛍の舞う街で[アニメ]
８月３日　夏休みアニメ「虹色ほたる～永遠の夏休み～」(105分)
◆チャレンジ！はくぶつかん
毎月第２・第３土曜、日曜、祝日　小学生向け　随時受付
チャレンジ！マークをさがして はくぶつかんをたんけん！
６月８日・９日・15日・16日　テーマ：花
７月13日・14日・15日・20日・21日　テーマ：海
８月10日・11日・12日・17日・18日　テーマ：青
９月14日・15日・16日・21日・22日・23日　テーマ：黒
◆たいけん教室～みんなでためそう～（予約制）
毎週日曜日、13:00～14:30　幼児・小学生20名程度　参加無料
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。
※要事前申込み。参加を希望する日の1週間前の日曜日から前日の9:30～16:30まで（休館日を除く）電話または博物館で先着順に受け付けます。１度に３名まで予約可能です。詳細はお問い合わせください。

6月	7月
２日 チャグチャグ馬コづくり	７日 光るバッジづくり
９日 草花のそめもの	14日 ちぎり絵のうちわ
16日 スライムであそぼう	21日 きとうごとくいちろう先生の木の工作教室
23日 のびちぢみしゃくとり虫	28日 まが玉アクセサリー
30日 ふしぎなビー玉おもちゃ	
8月	**9月**
４日 ちぎり絵のうちわ	１日 休館日
11日 土偶づくり	８日 休館日
18日 恐竜ぬりえカード	15日 入浴剤づくり
25日 ガラスの万華鏡	22日 ばねのキツツキおもちゃ
	29日 さとうかつひで先生の竹トンボ

定時解説

日曜日を除く毎日　13:30～14:30
解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員がご質問や解説のご希望におこたえしています。

利用のご案内

■開館時間　9:30～16:30(入館は16:00まで)
■休 館 日　月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
※８月５日、８月12日は臨時開館
資料整理日（９月１日～10日）
年末年始（12月29日～１月３日）
■入 館 料　一般300(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料
(　)内は20名以上の団体割引料金
※９月16日(月・敬老の日)は、65歳以上入館料無料
※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより
第137号
平成25年６月１日発行

編集　岩手県立博物館
〒020-0102　盛岡市上田字松屋敷34
Tel.(019)661-2831 / Fax.(019)665-1214
発行　公益財団法人岩手県文化振興事業団
〒020-0023　盛岡市内丸13-1
Tel.(019)654-2235 / Fax.(019)625-3595